シンポジウム

コロナの時代をいかに生きるか、『立正安国論』に問う

《コロナ禍を生みだしたものは何か》

三原　「ＴＯＫＹＯ　２０２０」の年に入って、新型コロナ感染症が全世界に拡大しました。このため、わが国では、今年の四月から五月にかけて、緊急事態宣言が首都圏に発令され、その後、全国に拡大されました。私たちは、政府が提唱する「新しい生活様式」にしたがい、必ずマスクをつけるという不便を伴った「自粛生活」に入りました。この宗務院も一時閉鎖されるという異様な事態を経験しました。東京駅や品川駅のコンコースの人影は少なく、いくたびか乗車した新幹線の車両の中を一人で過すという体験は、私にとって、初めてのことでした。そして、緊急事態宣言の解除された五月の連休明けに見た、新幹線の車窓に広がる緑あざやかな関ヶ原の山々、富士山の光り輝やく瑞々しい光景は、ひとしお、心に残り、私たちの経済活動が環境を汚染していることに改めて気付きました。このように国民の経済生活が損傷される、不安で不便な「新しい日常」の中で、私は宗祖の『立正安国論』を新鮮な気持ちで読み始めました。

旅客来りて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天変・地夭・飢饉・疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、すでに大半に超え、これを悲しまざるの族、あえて一人もなし。

（定遺二〇九頁）

この冒頭の一文に、私の心は共鳴しました。近年の災害に苦しみ、加えてコロナ禍の不安におびえる人たちも、共感することと思います。『立正安国論』は、これらの災禍の原因について、「これ何なる禍により、これ何なる誤りによるや」（定遺二〇九頁）と、問を起こし、「これ偏に法然の選択に依るなり」（定遺二一七頁）と、当時の百科全書ともいうべき一切経の引用によって推論します。この主張をいかに受けとめるか、これが、本日のシンポジウムのテーマです。

さて、新型コロナ感染症の原因について、文化人類学者の上田紀行氏は「現代の矛盾を映し出す鏡」（『毎日新聞』二〇二〇年四月一七日）の中で、石弘之『感染症の世界史』（角川ソフィア文庫　二〇一八年）を参照して、次のように述べています。

> 現代の新興感染症が熱帯林の破壊という環境問題が生み出しているものだということだ。感染症は古来、動物由来のものが多いが、特に現代の熱帯林の大規模破壊と集落の急膨張ですみかを失った動物が人の生活圏に出没し、それらと接触したり食用にしたりすることから人間が感染し、それらがまたたく間に大都市に到達し、世界規模の感染となる。

この文章からは、疫病のみならず、頻発する自然災害にも、私たち人類の思想・行動が深く関わっていることを想定することができます。『立正安国論』の論旨は、現代に通じるのかもしれません。

この新型コロナ感染症の拡大をうけて、池上本門寺は「新型コロナウィルス疫病病魔退散祈願一日一万遍百日百万遍唱題祈願」を、六月八日にはこの宗務院講堂で全国修法師会連合会が「新型コロナウィルス疫病退散祈禱」を修し、私も参列しました。『毎日新聞』には、宗教界の出来事を報じた次のような記事がありました。

終息祈る　同じ時

宗教・宗派超え　東大寺呼びかけ

新型コロナウィルスの感染が広がる中、奈良市の東大寺が全国の寺や神社、教会に、時間を合わせて毎日正午に祈ろうと呼び掛けている。（同　四月六日）

二四日には東大寺に、同寺のほか、高野山真言宗やカトリック大阪大司教区などの代表者らが宗派を超えて集まった。（同　四月二七日）

海外のキリスト教会では、次のような事態が生じました。

コロナ拡大　アフリカ悲鳴

「信仰で克服」　科学と距離置く指導者も

（略）科学的知見と距離を置く指導者もいる。キリスト教とイスラム教が共存するタンザニアでは、マグフリ大統領が「キリストの体である教会の中ではウィルスは生存できない」と信仰の重要さを強調。国民に教会やモスク（イスラム教礼拝所）に行くことを奨励し、野党から批判を浴びる。（同　四月一八日）

このような、さまざまな宗教のいろいろな対応が報じられました。また、有名芸能人のコロナによる死去とその対応をめぐってあれこれ取り沙汰されたことも忘れることはできません。

本日出席の五人のシンポジストは、日蓮聖人の宗教と『立正安国論』について、深い見識をお持ちの方々です。すでに一年近くになるコロナ禍の中で、『立正安国論』にふれて、どのようなことを考えられたのか、最初に、各自五

分程度で発表をお願いいたします。

最初の発表者・古河良啓上人には、とくに宗祖の一生における『立正安国論』の位置、そして、後世にさまざまな問題を投げかけたメッセージをファンダメンタリズム（原理主義）的に受けとめるべきなのかどうか、について、主にお話ししていただきます。併せて、このたびのコロナ禍の中で感じたこともお話し下さい。

古河　まず、「宗祖の一生における『立正安国論』の位置」についてお話させていただきます。『立正安国論』は、『安国論副状』や『安国論御勘由来』に「勘文」とありますように、宗祖において「勘文」として述作されたことが知られます。

宗祖は正嘉元年の大地震をきっかけとして、うち続く災難の原因を釈尊の一切経に照らして勘えられ、現実に行われている災害対治の祈祷に効験がなく、かえって災難が増すばかりであるという理由を知り、止むにやまれず勘文一通を作り、『立正安国論』と号して文応元年に北条時頼に奏進されました。それは災難に苦しむ人々を救うために、国土の恩に報いようとする心情にほかならないと述べておられます。

宗祖はそのご生涯のなかで再三にわたって『立正安国論』を浄書されております。また晩年に至るまでの著述の中で幾度も『立正安国論』について言及されております。『開目抄』をはじめとして、『立正安国論』の書名を挙げて言及されるもの、書名の明記はなくとも『立正安国論』を指しているもの、「勘文」と称して『立正安国論』を指しているものなど、その数は多数にのぼり、奏進後から晩年に至るまで、くり返し『立正安国論』について言及されていることが分かります。

そうした中で、『立正安国論』の奏進とその後の諫暁を『撰時抄』で仏弟子として三度の高名、「一念三千と申大事の法門」（定遺一〇五四頁）と称されていること、『立正安国論』の中で予言した二つの難が興起し、『立正安国論』

は「白楽天の楽府」（『種種御振舞御書』定遺九五九頁）よりも優れ、釈尊に支えられた「未来記」（前掲書）として位置付けられていることを知ることができます。

これらのことから、『立正安国論』は為政者に奏進をして終わるということではなく、『立正安国論』と立正安国の思想は、時代の動向とともに宗祖に常にあり、そのご生涯を通して展開されたことが拝察できます。それでは、こうした宗祖のご生涯を一貫した『立正安国論』を私たちはどのように受けとめていくのかということです。

『立正安国論』は宗祖滅後から今日に至るまで、多くの諸先師や研究者によって註釈や解説がなされてきました。諸先師たちは、「立正」とは？「安国」とは？「実乗の一善」とは？「破邪の対象」は？ということについて、文上と文底、附文と元意という風に、文上に顕わされたことと、その文底にある宗祖のご本意というように、時として二つの面から註釈がなされてきたことが知られます。

その背景には、『立正安国論』が一通の勘文として述作、奏進された書であること（対外的、その書き方も異なるということ）、そして、その委細は奏進後の公場対決で明らかにされようとしていたのではないか、ということなどがあります。佐前佐後の法門の異相という観点などもありました。

そこで大切なことは、日蓮聖人が『立正安国論』を述作された当時のお立場、どのような時代で、身を置かれていた状況下で、なぜ書かれたのか。述作された当時の視点とともに、宗祖のご生涯を通して、宗祖のお考え、宗祖の視点に立ち返って、宗祖に立ち返る努力をしながら拝読する。これがまず何よりも第一と思います。

「ファンダメンタリズム的に受けとめるべきなのか、どうなのか」ということについては、その言葉をどう定義するかにもよると思いますが、宗祖の示された法門や教え、根底にある精神を普遍的なものとして領受すること、原理を受けとめることと、原理主義とは違うのかなと感じます。宗祖の教えの真意、その主張の示すことの根本をくみ取り、時代の進展に応じていかに実践していくのか、体現していくのか、時代の中での手立てを講じていくことが必要では

ないかと考えます。

文上に示されたことをそのまま現代に置き換えて、引き当てて考えることも必要な時があるかと思いますが、私は、『立正安国論』と宗祖がそのご生涯で示された仏教のあり方、釈尊仏教の世界に生きること、物事の道理、善悪や価値観、仏弟子として人々と社会に寄り添う姿勢を学び、これからの僧侶としての活動の背骨としたいと考えています。

未曾有のコロナ禍にあって、世界中が直面する危機的状況に、感染症の脅威と、対処・収束の困難さを知り、少しく無力感を覚えました。『立正安国論』が今のこの現実にも増して壮絶な状況で述作されたことの重みをあらためて感じ、宗祖の示された指針をもとに、仏教者としてこの事態をどう受けとめるのか。仏教者だからこそ伝えられること、寄与できることがあるのではないかということを考えるようになりました。

三原　ありがとうございました。次の発表者、水谷進良上人には、後世の門下の人々が『立正安国論』をどのように受けとめ、活動してきたのか。そして、創価学会や顕正会はどのように受けとめ、活動しているのか、についてお話ししていただきます。併せて、このたびのコロナ禍の中で感じたこともお話し下さい。

水谷　まず、はじめに門弟による『立正安国論』受容ですが、日蓮聖人遺文は檀越へ宛てられた著作が大半をしめており、門弟教化の足跡はほぼ見られません。その理由はお近くで随身給仕されていたため、口頭で教化されていたことなどによると考えられます。

したがって、日蓮聖人が門弟達にどのような教導をなされていたか、ということを御遺文から辿ることは困難ではありますが、門弟達の行動から、その一端を知ることができます。

すなわち、門弟達は日蓮聖人滅後、早い段階で公家や武家等の権力者に対し、『立正安国論』の精神である謗法禁

断・正法帰依を要請する『申状』を作成し、安国論を副申書として提出されていた事実が確認できます。

一番早い諫暁活動は、聖人滅後三年後、弘安八年（一二八五）に六老僧日昭・日朗両上人が武家へ『申状』を提出（『日蓮宗宗学全書』第一巻七頁・二一頁）されたことにはじまり、以来上代三〇〇年の中だけでも、計六二度の諫暁活動が確認できます（本間俊文『初期日興門流史研究』山喜房仏書林　平成二七年　二五五頁以降）。

内訳としては日興門流が一七度、身延門流が一五度、日什門流が一三度、中山門流が七度、四条門流が四度、比企谷門流が二度、浜・六条門流が一度となります。また、安国論を副申書とせず、『申状』のみの諫暁活動という事例もありますが、それもまた、安国論の精神を継承したが故の諫暁活動であると言えましょう。

つまり門流の相違を問わず、各地の日蓮門下でこのような諫暁活動が展開されてきた事実から見れば、日蓮聖人における門弟の教導には、『立正安国論』、及びその精神を継承することを教示されていたと言えるでしょう。

また創価学会、顕正会でも『立正安国論』は重んじられます。それは彼らの母体となった日蓮正宗大石寺が安国論を重んじ、宗教活動を徹底していることに由来します。例えば日蓮正宗における御会式法要は、我々日蓮宗ですと日蓮聖人が入滅された日、御遠忌という考えで御報恩の誠を捧げますが、彼らは、日蓮聖人が末法本仏の本地を顕された日であると見、慶事として祝います。

よって参列者は黒スーツに白ネクタイで装い「おめでとうございます」と挨拶し、その喜びを表現します。特にその法要においては、必ず『立正安国論』を奉読し、それと共に門流諸師が安国論と共に提出した先述の『申状』を読み、その功を讃えます。その意味は言うまでも無く、門流先師による安国論を用いた諫暁活動に習い、破邪顕正の誓いを深めるという考えに基づくのです。

また彼らは安国論内における「設ひ五逆の供を許すとも、謗法の施を許さず」（定遺二二三頁）という教示を徹底的に遵守しており、大石寺の資本は全て、日蓮正宗の信仰を持つ人からでないと受けてはいけないことになっていま

す。所謂不受不施思想ですが、分かり易い例で言うと、正宗の寺院には賽銭箱がありません。物見遊山や観光目的の人にお金を置いていかれると、安国論の不受不施義に背くことになるからです。「観光とはいえ、お寺にお参りに来ているのだから信心はあるだろう」という柔軟な考えは許されません。日蓮正宗では受戒を受けた者のみを正式な信徒であると見、それ以外の者に施すこと、施されることは厳しく誡められ、またその指導は末寺や信徒にまで行き届いているのです。

このような徹底した安国論至上主義とも言うべき態度は、今の時代にそぐわないという意見もあるかもしれませんが、日蓮聖人の教えを護るという信仰者の姿勢においては、見習うべき点もあるとも思います。

次いで創価学会の安国論受容ですが、ご承知の通り、二〇一四年に会則変更、二〇一七年には会憲の制定があり、大石寺教学からの脱化を計ろうとしつつ、未だ脱化しきれない、いわば教学変更の過渡期ということもあり、突飛な安国論理解はないように見受けられます。あえて言うならば、二〇一七年出版の会員向けの安国論講義書『世界広布の翼を広げて　教学研鑽のために　立正安国論』には「実乗の一善こそ平和の大道」としており、彼らが今注力している平和活動との関連性が語られ、実乗の一善解釈も「南無妙法蓮華経」であると記載されています（二三四頁）。

一方、顕正会は主張が徹底化されており、彼らの主張はとにかく「国立戒壇を建立せよ」という一点です。よって、『立正安国論』もそのような前提からの解釈です。例えば「実乗の一善」については、

> 附文の辺は実大乗の法華経であるが、元意は寿量文底独一本門の三大秘法、すなわち本門戒壇の大御本尊のこと
>
> （浅井昭衛『立正安国論謹講』二三四頁　昭和六三年　顕正会）

とて、大石寺が金科玉条とする弘安二年の本門戒壇本尊を意味すると記載されており、安国論そのものの講義では

無く、彼らが喧伝する国立戒壇論と矛盾しない安国論理解となっています。文応元年と弘安二年という時代矛盾は、附文と元意ということで会通されますが、要は一往は日蓮聖人への帰依であると見、再往は本門戒壇本尊（日蓮聖人の当体）と見る考えです。

これらのことについて詳しく述べることは、今回のシンポジウムの趣旨にそぐわないため割愛させて頂きますが、東日本大震災、そして今般のコロナ禍。良くも悪くも、国難などの有事の度に注目されるのが『立正安国論』です。私自身、コロナが流行しだした当初は加行中であったため、その情報は二月以降に知りました。ちょうどその頃はダイヤモンド・プリンセス号で罹患者が発生したことによって騒がれている最中であったと記憶しています。

今般のコロナの蔓延には宗教的意味はあるのかなど、私自身考えさせられることが多々あります。種々議論はあると思いますが、我々僧侶がこの問題に宗教的に寄与するということは、法華経・日蓮聖人の教えからこの問題を考えることであると考えています。

三原　ありがとうございます。これから三人の方々には、このコロナの時代に直面し、『立正安国論』をどのように受けとめられたのか、『立正安国論』から一、二の文章を引用して発表していただきたいと思います。髙佐宣長上人、お願いいたします。

髙佐　ヒトに感染するコロナウィルスは、これまでにも六種類知られていて、ヒトに蔓延している普通の風邪のコロナウィルスが四種、そして二〇〇二年に中国の広東省で発見されたＳＡＲＳウィルス、二〇一二年にサウジアラビアで発見されたＭＡＲＳウィルス、以上六種類がコロナウィルスに分類されるそうです（国立感染症研究所のウェブサイト掲載「コロナウィルスについて」https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/9303-coronavirus.html）

私たちが風邪をひいた場合、おおよそ八割くらいがウィルスを原因とし、ライノウィルスによるものが最も多く、次にコロナウィルスによるもので、そのうちの一割五分から二割くらい、それからアデノウィルス、その他に、インフルエンザウィルスによるものを、風邪と称したり称さなかったり、とそんな具合なのだそうです。

そうであるならば、今般の新型コロナウィルス感染症とその災禍だけを「コロナ」とか「コロナ禍」とかと呼びたくない、とは考えております。しかし、時間の制約がありますし、コーディネーターの三原所長も、この表現を用いておられますので、本日はその呼称を用いることといたします。

新型コロナウィルス感染症の問題が発生して暫くの間は、私も意固地になっていたのですけれども、「意地を通せば窮屈」で、疲れてしまいました。と、余計な口上から始めましたが、この問題意識、とまでは申しませんけれども、この感覚は、私のこのシンポジウムでの発言に付いて回るだろうと思いますので、敢えて申し上げた次第です。

本題に入ります。『立正安国論』には、薬師経の七難が説かれており、その七難に件の「他国侵逼の難・自界叛逆の難」も含まれる訳ですが、その七難の最初に上げられているのが「人衆疾疫の難」です。

> 薬師経に云く、もし刹帝利・灌頂王等の災難起こらん時には、いわゆる人衆疾疫の難・他国侵逼の難・自界叛逆の難・星宿変怪の難・日月薄蝕の難・非時風雨の難・過時不雨の難あらんと（定遺二一一頁）

と、『立正安国論』に薬師経が引用されています。「人衆疾疫の難」の前に、「非時風雨の難・過時不雨の難」について触れておきます。これらは所謂「異常気象」「気候変動」と申せましょう。三原所長も引かれましたように、『安国論』の冒頭に「天変・地夭・飢饉・疫癘」とあり、「天変」（「星宿変怪の難・日月薄蝕の難」もこれに含めてよいかと思われます）は古来、人類を最も悩ませて来た問題であったであろうことを示唆するかと思います。換言すれば、

気候変動は、昨日今日の問題ではありません。「人衆疾疫の難」に話を戻します。石弘之氏によれば、五十億年の地球の歴史のうち、ウィルス乃至微生物は四十億年前から存在し続けているそうです（https://kadobun.jp/feature/interview/9yhcdzonav40.html）。

日蓮聖人の時代、薬師経の時代も、「人衆疾疫難」は人間を苦しめて来ていました。よって、感染症を「熱帯林の破壊という環境問題」、「気候変動」の問題として取り扱おうとする姿勢を私は共有しません。エボラ出血熱（因みに、「エボラ」は、この病気が最初に発見されたコンゴの川の名前です）ならともかく、コロナに於いてそれを言うことは、かえって問題の本質を見えにくくするものと考えます。

七つの難は、至極当たり前のことながら人間の視点から見た厄災です。人間とその環境との関係性の問題であることが多くを占めています。環境というのは、人間の環境です。環境を問題にする際、人間とは別個に環境があるかのような言辞を耳にすることがあるのですが、環境は私たちの環境です。別の表現をすれば、「風雨」が「非時」であったり、「不雨」が「過時」であったりする、そしてそれが「難」であるのは、そこに人がいるからで、どんなに雨が降ろうが降るまいが、そんなことで地球はびくともしないし何ともありません。雨風が適当に降ったり吹いたりしてくれないと困るのは人間である、環境でも地球でもない、ということです。『立正安国論』を読み直すとすれば、この当たり前の視点からなされなければならないであろうと思います。

三原　ありがとうございました。影山教俊上人、お願いいたします。

影山　このような状況下で、この論題に応えるには、日蓮宗現代宗教研究所が設立された当時の目的について考察する必要があります。それは「教学の現代化」、すなわち「教化学」を前提にする必要があります。なぜなら、この

『立正安国論』の論旨は現代人のリアリティ（現実感）からそのまま受け入れられないからです。

はじめに「教化学」のスタンスについて述べたいと思います。それは、どのように受け入れられるべきかといえば、まずその論旨について、「災難の由来」は「災難の現状は正嘉元年以来四年の間、天変地異によって飢饉や疫病が蔓延した」こと、その理由として「災難の経証」は「阿弥陀経などの邪教がはびこり、日本を守る諸天善神がいなくなったこと」をあげ、その「災難」を取り除くために「汝早く信仰の寸心を改めて、実乗の一善に帰せよ」（定遺二二六頁）と「正法帰依」の信行によって「即身成仏、仏国土顕現」するというもの、信仰による「安心」を述べています。

しかし、現代人の私たちにとって、コロナ禍などの社会問題を『立正安国論』の論旨に沿って、言語理性にもとづき「知識」として理解することは可能ですが、その論旨のまま、実乗の一善に帰依すれば、この世はこのまま仏国土であると結語することは、現代人のリアリティからはあまりにもかけ離れているものです。それは信仰とは知識的な理解を鵜呑みにして救済を期待することではないからです。

ところで、現代人のリアリティからは受け入れがたい『立正安国論』の論旨は、それはスピリチュアル（霊性・宗教的）な事柄として扱われています。そして、それはその時代のリアリティとして、「教・論・釈」にもとづく教相判釈だから、それはそのまま字義通りに理解すべきだといわれてきました。実際に、これまでの教学論議では、言語理性にもとづきそのように理解されてきました。しかし、それは現代人にとって、あくまでもスピリチュアルな事柄だから、何らかの形で現代のリアリティにもとづく理解を加えないかぎり、教義学は学問としての存在価値を失うように思います。事実、宗教学、仏教学、教義学など、宗教ごとを哲学的に解釈する学問は衰退しています。ここに「教化学」が求められる所以があるのです。

ところで、日蓮宗現代宗教研究所が「教化学」を志向する所以は、じつにここにあるのです。このような教学議論

の歴史をひもとけば、昭和二六年にはじまる創価学会の折伏大行進による教線拡大から、昭和三九年の公明党の設立までを防げなかったという教訓によって、教学の現代化、すなわち、「教化学」の必要性が叫ばれました。そして、このような「教化学」とは何かと問えば、それはまさに現代人のリアリティによって御遺文を読み解く作業といえます。

ここで「教化学」を理解するために、まず一つ目として「現代人のリアリティ」と「スピリチュアルな事柄」とを対比させて考えてみました。現代人のリアリティとは言語理性にもとづく科学的な認識にあり、その言葉には必ず客観的な裏付けが存在します。例えば、「一＋一＝二」という観念的な説明は、具体的に赤いリンゴが一つずつ置いてあれば、そこには二つの赤いリンゴが存在し、誰もがその二つのリンゴを認知（意識）できることで成立します。

ところが、スピリチュアルな事柄とは、経文の文言や宗祖の言葉など聖者の内的な体験（境地）の告白もしくは記述のことだから、それらは観念的な文言として知識的に理解はできますが、それは自分自身の内的な体験としては認知できない無意識の世界です。だから現代人にとっては、そういうものだと信じる以外に手立てのない事柄であると分かります。

これらのことから、現代人のリアリティとは、言語理性にもとづく言葉と、その事実の認知（意識）、すなわち、言葉と現実が対応していることが重要なのです。この言葉に対応する事実という考え方が現代の物理学や化学を支える科学的なリアリティなのです。

ところが、「教化学」のスタンスとは、同じ科学的なリアリティにもとづくものですが、物理学や化学などの客観的な学問ではなく、意識の科学、もしくは内観の科学のことです。内観の科学とは聞き慣れない言葉ですが、私たちの心を実験室にして、教義学的な知識を信行によって検証することです。つまり、『立正安国論』の論旨を「信仰の寸心を改める」という信行によって、私たちの心の鏡に「仏国土など」を映し出せるか、それを発見することができ

るか、という体験、もしくは「気づき」を意味します。単純にその文言が理解できても、信行によって自らの心を内観して、つぶさに内心に「仏国土など」を発見できなければ、それは絵空事になるということです。この内観の科学が「教化学のスタンス」なのです。

続けて二つ目として、この「教化学」のスタンスを日蓮聖人に求めたいと思います。いま「教化学」スタンスとは内観の科学だといいましたが、この内観について論じているのが、日蓮聖人が「当身の大事」と呼んだ『観心本尊抄』です。その中でとくに、

> 無顧の悪人も猶妻子を慈愛す、菩薩界の一分なり。但だ仏界計り現じ難し、九界を具するを以て強て之を信じ、疑惑せしむること勿れ（定遺七〇五頁）

の文言が、内観の科学を端的に表しています。ここには悪人も菩薩界の一分（妻子を慈愛する）という内観による気づきと、それはそのまま私たちに九界が備わっているという現代人のリアリティにつながります。さらに言葉では表現できない仏界（仏界計り現じ難し）は、スピリチュアルな事柄だから、それは信じること、疑わないこと、分別しないことだといいます。

すなわち、ここに見えた「教化学」のスタンスとは、悪人の心中に「妻子を慈愛する」の菩薩界があるという気づき（現代人のリアリティ）を前提に、「仏界計り現じ難し」というスピリチュアルな事柄は分別しない世界（無分別）のことだから、観心（己心を観じて十法界を見る）という信行を通じて体験しなければ分からないことだと、内観の科学にもとづいて解説していると理解できます。

さらに三つ目として『立正安国論』を教化学のスタンスから眺めれば、教化学のスタンスとは、観心・唱題による

瞑想体験と、気づきの実際のことだといえます。観心・唱題による成仏（仏界）は、それはスピリチュアル（天台大師の言葉では不可思議）な事柄だから意識化することはできない。だから日蓮聖人は、「信じる」ことで無分別の意識状態を誘導せよと、信ずることによって生ずる安らぎの状態、すなわち、「以信代慧」を強調しています。

さらに観心・唱題による気づきは健康的な慈愛の心（菩薩界）までが、意識化の対象になるといいます。まさにこの健康的な意識状態に気づくことによって、私たちは安心という仏国土を志向し、その顕現への信行が生まれるのです。これが伝統的な仏教の営み、「行学二道」の世界、仏道と呼ばれるものです。とくに「信仰の寸心を改める」という観心・唱題によって、仏国土という菩薩界の健康的な気づきによって「唱題成仏」という信仰の動機としての「社会化」が生まれ、それが宗教体験や、宗教運動となるのです。

これを極めて簡要に言ってしまえば、言語理性によって正しい解釈をしていても、その解釈された言葉は、観心という信行がなければ、その存在意義を失うのです。さきの「菩薩界」のように、観心によってスピリチュアルな事柄に気づくことが重要なのです。さらには疑わない（勿令疑惑）ことによって、言語理性を離れて「信」を獲得し、もしくは観心・唱題による無分別の体験によって、スピリチュアルな事柄に近づくことが必要なのです。まさに信仰の寸心を改める信行によって、「心はこれ禅定ならん」という現実に気づくことが重要であると思います。

三原　ありがとうございました。赤堀正明上人、お願いいたします。

赤堀　新型コロナのパンデミックを予見したかのような記事が三〇年前の『岐阜新聞』に掲載されています。見出しは、「二〇二〇年、全人類の半数が伝染病に」というものです。この記事のニュースソースはＷＨＯがまとめた地球温暖化の影響予測報告書に関しての、共同通信記事です。

報告書のタイトルには「気候変化の健康影響」と題され、二〇二〇年に摂氏一・八度気温が上昇することによる「地球環境破壊が人類に与える影響を総合的に予測」したものです。

温暖化は、発展途上国を中心に世界人口の半数近くを感染症に罹患する危険性を招き、オゾン層の破壊による紫外線の増加は免疫力の低下による皮膚ガンをひき起こすのです。「温暖化による伝染病被害だけでも、世界人口の約半数に及ぶ」と計算されています。この他、海面上昇による洪水などと関連して害虫の繁殖、食糧危機、大気汚染などが挙げられています。岐阜新聞社の解説には「温暖化をめぐる論議は、これまで炭酸ガス排出量を削減する対策に集中し、地球の気温が上がると人間にどのような影響を与えるかという、最も重要で基本的な問題が国際会議などで取り上げられることはほとんどなかった」と指摘しています。

この記事を書いた客員論説委員の内城義貴氏は「二〇二〇年に感染症が大流行すると予測したものではないが、世界的なコロナ禍が、多くの人が地球環境の大切さを再認識する機会になれば」と話されています。この記事からコロナ禍は突発的なものではなく、人類によって惹起された災禍であることが理解されます。

私は平成一九年の安国論奏進七五〇年に『立正安国論』全講の機会を得ましたが、日蓮聖人のお考えには、いわゆる天災というものはなく、その基には、人の意識、行動が潜在する人災であるということを承知したのです。

地球環境破壊の中で、最もショックを受けたのが人間の精子の衰弱に関する研究です。『朝日新聞』一九九八年一一月八日付朝刊には、「人の卵巣がダイオキシン類に汚染されていることを東京大学と国立環境研究所のチームが突きとめた。ダイオキシン類は、環境ホルモンとして働いて卵子の質を変え、受精卵の発達に影響を与える恐れがあるため、専門家は警戒を強めている」との記事が出ています。母乳や血液の汚染は既に明らかにされていますが、男性の精子もダイオキシンの影響から減少傾向がみられます。

帝京大学・押尾茂講師の意見では「日本人の精子の減少以上に問題なのは、運動率三〇％、正常形態率五〇％とW

ＨＯの基準を下回っていて、特に若者の精子が不良になっている」点です。正常な精子に比べ、濃度も低く、尾のないもの、運動能力の不足している精子が目立ち、コンピュータ処理した顕微鏡写真には「発狂する精子」とコメントが付けられています。

最近の情報でも自然界ではケニアで四千万匹のサバクトビバッタが大量発生し、一日三万五千人分の食料を食べ尽しています。人間界では、東アフリカで、二千五百万人が飢餓に苦しんでいます。

ここで人類の行為と自然に及ぼす関係を見てみます。大量消費社会の創出によりエネルギーの過大消費、化学肥料の多用化となり、二酸化炭素の増加、オゾン層の破壊は、地球の温暖化をもたらし、南北極の氷山の融解、生態系の変化異常の発生を呼び、従来とは異なるウィルスなどの発生、パンデミックをもたらします。この順列から見て取れるのは、今のコロナ禍は、人類の大量消費社会の仕組みから不可避なものとしてもたらされたと推論されることです。さらにこの順序を逆次に見て、コロナ禍の原因を遡及すれば、人類の大量消費経済の仕組みに帰着するということです。

人類による温暖化は地球を犯し、国土は悲鳴をあげています。この人間と自然との連環を最も適確に示し、人々の思想行動の責任を問うた初めの人は日蓮聖人なのではないでしょうか。

精神医学者の斎藤環氏は「コロナ・ピューリタニズムの懸念」の中で、「疫病は倫理観を変える」と語っています。「一四世紀にヨーロッパの人口の約三〇％（地域によっては八〇％）を死亡せしめたペスト（黒死病）は人の死生観に影響を及ぼし、「メメント・モリ（死を思え）」なる標語を生んだ」のです。ＨＩＶは当初、神罰とも言われたが、ＬＧＢＴの解放運動にもつながったのです。

コロナ禍から何を学び、どう考え、どう行動するかは、各人、各宗教に問われるところでありましょう。

三原　ありがとうございました。さて、現在、御降誕八〇〇年を記念して、日蓮宗檀信徒協議会の依頼で、作家の佐藤賢一氏が「パッション」という題名で、小説日蓮聖人を執筆しています。『小説新潮』六月号から連載が始まり、この一一月号に第六回分が掲載されています。その第二回分（七月号）に、『立正安国論』奏進以前の、いわゆる辻説法、法論の内容が、宗祖、日昭上人、四條金吾の会話という形で興味深く描かれています。やや長くなりますが、紹介します。

日昭は受けた。ええ、是非にも四條様の力をお借りしたい。これを好機と鎌倉での法華経弘法に、弾みをつけたいものだと考えております。

「とはいえ、ううむ、やはり多くは期待できませんでしょうか」

「と仰るのは」

「なかなか伝わりません。辻説法など試みても、世人の反応は鈍いばかりで。法華経を奉じれば、この娑婆で救われる。そう説いても、そりゃあ、救われたい、もちろん救われたいとは思うが、この有様では救われようなどないではないかと、最後は腹立ちながら返されるというのが大方で……。我が師の日蓮ならば、もっと耳も傾けてもらえるのでしょうが、それが私となると……」

「いやいや、弁殿、私とて思うようには運んでおりません。念仏僧に囲まれて、法論では仮に圧倒できたとしても、そこで論より証拠ではないかと切り返されては、たちまち窮地に追い込まれてしまう。現実は浄土宗のいう通りではないかと凄まれたら、こちらが黙りこむしかなくなるところでした」（略）

「日昭殿のいわれる通りだ。昨秋は洪水にやられ、今秋は日照りにやられ、ひもじさに、さらなるひもじさが重なりかねない。なるほど法華経に縋れば娑婆で報われるなどと説かれても、容易に信じる気になれないでしょう

な」

「そうなのです、四條様。私が鎌倉に出てきてからというもの、何だか良いことがありません。おまえのような悪僧が来たせいではないかと、そう世人に悪態つかれて終わることさえあります」

佐藤賢一氏は、現実世界を穢土と見る浄土教と、そして、同じこの世界を浄土と見る法華経の立場とを巧みに描き分けていると思います。『立正安国論』で、この法華経の立場を示したものが、

汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ。しかればすなわち三界は皆仏国なり。仏国それ衰えんや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ破れんや。国に衰微なく、土に破壊なくんば、身はこれ安全にして、心はこれ禅定ならん。この詞、この言、信ずべく崇むべし（定遺二二六頁）

の有名な一文です。現在の私たちの生きているこの世界でも、宗祖の生きておられた鎌倉時代と変わることなく、大地震を始めとして次から次へと続く大災害、そしてこのコロナ禍の現状と比較して、法華経の世界観を表現した有名なこの一文を、どのように受けとめればよいのでしょうか。

東日本大震災で家族を失った被災者を取材した奥野修司氏は、『魂でもいいから、そばにいて―三・一一後の霊体験を聞く―』（新潮社　二〇一七年）の中に、次のようなことばを書きとめています。

（夢で見た）妻が言った言葉の一つ一つ、（略）とくに『待っている』というのは、私にとっては究極の希望です。みなさんの言う希望は、この世の希望ですね。私の希望は、自分が死んだときに最愛の妻と娘に逢えることなん

です。死んだ先でも私を待っていてくれるという妻の言葉こそ、私には本当の希望なんです。いつか再会できるんだという一縷の希望が持てたからこそ生きてこれたのだと思います。

これは、佐藤賢一氏が『パッション』で語らせた「法華経に縋れば娑婆で報われるなどと説かれても、容易に信じる気になれない」という浄土教徒の気持ちに通じるものでしょう。このような浄土教の世界観に、私たちはいかに向き合っていくのかを、そしてシンポジストご自身の、世界の見方が一変する、いわば「法華経の悟」（定遺一四頁）を各自一〇分程度の発表でお願い致します。最初に古河良啓上人お願い致します。

古河　まず、この浄土観の対比についてですが、これは自分がどのような世界で生きているのか、どのような世界で生まれて死に、どのような世界に死後行くのかということに通ずるお話なのかなと思います。

宗祖は『立正安国論』の奏進と、その後の法華経弘通、久遠の釈尊と法華経によって、人々の今生での安穏と無間地獄の道を塞ぐためにご生涯を捧げられたものと思います。

宗祖は、法華経信仰者は後生は霊山浄土に往詣することを説かれ、その霊山浄土では亡き家族と再会することができると説かれています。そうしたお手紙の中では、法華経信仰による後生の安心と、今を生きる人たちに来世での良きありようと安心を説いていらっしゃいます。

この世界で生きていくなかで、お題目、「南無妙法蓮華経の生き方」によって今生においてはお釈迦さまが常に見守っていらっしゃる。そして後生においても釈尊の慈悲と救いに包まれるのですよ、と現当二世にわたる安心の境界を宗祖は示されているものと受けとめています。「今、生きている世界はつらいからあきらめて、亡くなったあとはとても良い世界に行ける」「現世をあきらめて来世を望む」という考え方とは、はっきり異なるものと思います。

それでは、この娑婆世界、釈尊の御領であるこの世界を日々の生活の中でどのように感じるのか、考えるのかということですが、とても難しいです。仏眼に映じた仏土観を私たちがどのように覚知し、人々と共にし、そのような浄土を現実に顕現していくのか。

そうしたことを考えるときに、私個人のわずかな体験で申し上げれば、少しずつですが、久遠の釈尊を信仰できる立場、状況にあることに喜びと嬉しさを感じるようになってきました。そこには『立正安国論』と、そこで示される釈尊仏教の興隆ということが種火として自分の中にあるように感じます。

若い頃のつたない経験ですが、大学の国外研修や団参、個人旅行等で、インドをはじめ、スリランカ、タイ、シンガポール、チベットやブータン、中国など、アジアの仏教信仰のある国や地域に行く機会がありました。各国のお寺をお参りして、尊崇するご本尊の違い、依拠する経典、礼拝の仕方、考え方、その国の民族や文化が色濃く反映された仏教風習などを見て、仏教の多様性というものを肌で感じました。

殊に、何度かインドの仏跡にお参りさせていただきましたが、特に数年前に私の所属する東京南部の青年会でブッダガヤをお参りしたときの光景が印象的でした。私たちが訪れた一一月の下旬は、ちょうど一二月八日の成道会が近いということもあってか、たくさんの仏旗がはためいていて、世界各国からのたくさんの参拝者で賑わっていました。

小豆色の衣と袈裟をまとったチベット仏教僧、スリランカや東南アジア、中国の僧侶、日本のお寺の団参のような台湾の仏教徒の一団も参拝していました。また、大塔のそばで瞑想にふける人々の中には西洋の方々も多く見かけました。

世界各国から巡礼に訪れた仏教徒たちは、それぞれの礼拝作法でお参りをしていました。五体投地で礼拝する人、お経を唱えながら大塔を右繞する人、地面に座してお経典を読みふける人。私たちは、菩提樹の前で木鉦をたたいて法華経を読んで法要を営みました。

こうした光景を目の当たりにして、仏教の裾野の広さというものを強く実感しました。信仰のかたちやお参りの作法は、それぞれの国の文化や民族性と融合して、日本の私が思う以上に、想像以上に実に千差万別ということに気がつきました。

そしてあらためて実感したことは、ここで世界中の人々の合掌の向く先は言うまでもなくお釈迦様で、読むお経、お参りの仕方、身につけている衣や衣服が違えども、さらには国や文化が違えども、「お釈迦さま」だからこそ、お釈迦さまを中心として各国の仏教徒が一つの場所に集える、ということにあらためて感銘を受けました。

当然、本宗の教師として、本門の立場から見たときに、歴史上の始成正覚の釈尊と、壽量品で開顕される久遠実成の釈尊ということはありますが、しかし、この「釈尊だからこそ」、「釈尊にみながお参りしているんだ」という自分の喜びの気持ちは、「お釈迦さまの仏教」ということを宗祖が『立正安国論』で示されていたから、このように感じ得ることができたのかなと思っています。

宗祖は『四信五品鈔』の中で、「四信と五品というのが法華経を修行するのにとても大切なことだ」ということをお示しされておりますが、さらにその中でも、「現在の四信」のはじめの「一念信解」と、「滅後の五品」の第一の「初随喜」が最も大切であるということを説かれています。

四信五品の四信はお釈迦さま在世の導き、五品はお釈迦さま滅後の導き。その在世の導きの四信の最初が一念信解、五品のはじめが一念随喜です。一念信解は、寿量品の教えを通して、久遠実成の釈尊が開顕されたことを、一念、ほんのわずかでも、信心のこころを起すこと。一念随喜は、寿量品の教えを通して、久遠実成の釈尊が開顕されたことを受けとめて、一念のうちに随喜する、感激し喜ぶこと。

自分のことで大変恐縮ですが、アジアの仏教国で見聞きしたこと、ブッダガヤで感じたことを通してより強く実感したことは、久遠の釈尊の世界で生きていることの喜び、その救いに随喜、感激するということ。わずかな実体験で

すが、四信五品の一念信解、一念随喜のほんの一分として重なるように感じています。

これは少し話が広がりますが、アジアの釈尊仏教という視点で考える時、『立正安国論』に説示される如く、釈尊一仏を中心として仏教徒が連帯できる世界規模の機運を盛り上げていくこと、仏教の原点に戻り、釈尊とその教法のもとに世界中の仏教徒が一丸となって協力し、釈尊への信仰の輪を広げて仏教を興隆していくという視野を持つことも大切なことかと思います。

「立正安国浄仏国土、世界平和」と、毎朝の勤行のなかでお祈りいたしますが、こうした自分の実体験と感じたことを通して、釈尊の世界であり、忍土にあるこの今のいのちをどのように生きていくのかということを社会に人々に働きかけていきたいと思います。

「法華経の悟」というテーマからかなりずれてしまったかと思いますが、この彼此の浄土をいかに考えるのかということは、「自分がいまどのような世界に生きているのか」ということに通じることと感じましたので、私自身の体験をもって、このようなお話をさせていただきました。

三原　では、水谷進良上人お願いいたします。

水谷　ここでのテーマである「法華経の悟」というのが、私には今ひとつ意がくみ取れなかったため、どういうお話をすれば求められている問いにお答えできるだろうか、ということを考えたのですが、「よし。今回のテーマは安国論だから安国論を通読してみよう。そうすれば何か糸口が見えるかもしれない」、ということで、声に出して全文朗読してみました。

漢文の文字数は七五七〇字、訓じ方にもよりますが書き下すと約一七〇〇〇字。目で読むばかりで意外としていな

かった全文朗読でしたが、約五三分かかりました。声に出して読むことで今まで読めていたつもりの箇所も、つもりであったことに気付かされました。

そういう態度で安国論にぶつかり、あらためて読み直すことによって発見したことは、安国論の主題は正法帰依というよりも、謗法禁断に重きを置かれているのではないか、ということの再認識でした。

謗法とは広義では法華経、ひいては釈尊の教えに背くことを意味しますが、安国論内における謗法は、法然浄土教を意味すると言えるでしょう。つまり本文では、災難興起の根本原因は、法然上人『選択本願念仏集』において一切経の中で浄土三部経、また諸仏・諸尊中、阿弥陀三尊（阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩）以外を「捨・閉・閣・抛」するよう主張したこと、またその教えが広く世に蔓延していることが原因であると断定されます。

有り体に言えば、かかる法然上人の悪法が世に蔓延しているが故に、日本国守護の諸天善神が天上界へお帰りになり、正法をひろめる聖人も去ってしまったことから、そのすきに乗じて悪魔・悪鬼が押し寄せ、災難を引き起こすという主張です。つまり、選択集における捨閉閣抛という仏教破壊の教えが、当時の鎌倉社会に宗教的な悪影響を及ぼしており、日蓮聖人は正法帰依の前提条件として、かかる思想の停止を時頼に要請したのではないでしょうか。

なぜならば、安国論は九問九答一領解で構成されていますが、かの有名な一文「汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ」（定遺二二六頁）は第九段における主人の解答です。この直前には、経文の引用をふまえ、「広く衆経を披きたるに、専ら謗法を重しとす。悲しいかな、皆正法の門を出でて深く邪法の獄に入れり」（定遺二二六頁）とあり、安国論冒頭から第九段に至るまでは、災害発生の要因を究明され、充満している謗法、具体的には『選択本願念仏集』を中心に厳しく批判されています。

それを踏まえ、謗法退治と正法帰依の勧告として「汝早く信仰の寸心をあらため～」という発言に至るわけですが、この文が安国論内における主人（日蓮聖人を想定）最後の発言となります。それを受けた旅客（北条時頼を想定）の

領解が、最後の第十段領解です。

いよいよ貴公の慈誨を仰ぎて、ますます愚客の痴心を開き、速かに対治を回らして、早く泰平を致し、先ず生前を安んじ、さらに没後を扶けん。ただ我信ずるのみにあらず、また他の誤りを誡めんのみ（定遺二二六頁）

このように、最後は謗法対治の領解で結論づけられ、本文は終了します。つまり客は「速やかに対治をめぐらすこと」「他の誤りを誡めること」を了承したのであります。

このことから考えるに、安国論執筆時点、三九歳という若き日蓮聖人の思想信条が、法華経・南無妙法蓮華経にあったことは、前後の遺文からも明らかではあります。しかしその一方、安国論を通じて主人が要請・勧奨されたことは、法然浄土教の制止（＝謗法禁断）だったのではないでしょうか。

少なくとも安国論本文中においては、法華経信仰や題目口唱を勧奨する文言が見られず、「実乗の一善に帰せよ」と表現を仄めかされるに留まっています。何故直接的に、御題目や法華経の信仰を勧奨されなかったのか、これについては先師も解釈に苦心されているため、安易に答えを導き出す姿勢は慎まなければいけませんが、安国論はあくまでも北条時頼に宛てられた公文書です。時頼が安国論を読んだか、読まなかったのかなどの問題は詳らかではありませんが、少なくとも他の日蓮聖人遺文を読むようなことはされなかったでしょう。ということは、安国論は安国論をもって理解しなければならないのではないでしょうか。我々は種々の御遺文を拝読できる環境にあり、そこに見られる日蓮聖人の思想を踏まえた上で、その理解に適うような安国論理解へ導きがちです。しかし安国論においては、時頼の立場（禅宗信仰者・為政者）に立って読むという、冷静な安国論理解が求められます。

御遺文の読み方には、本文を率直に受容する方法と、対告衆の置かれている環境や教義理解の浅深なども考慮し、

行間を推し測り読まなければならないという二通りの拝読法があると私は考えます。安国論の場合は、教義理解がない為政者への公文書、また御自身で「勘文」と称されている事実から見れば、前者に依った読み方が誠実な拝読方法であるように思うのです。

私たちはよく「立正安国の精神で」と、安国論を旗印として用いますが、それはほとんどの場合、正法帰依という一面だけを使っている場面が多いように見受けられます。つまり、こんな世の中だからこそ僧俗一体となって法華経・御題目を唱えよう、弘めようというニュアンスで扱われ、安国論最大の趣旨である、謗法禁断という戒めには余り目を向けていないように思います。

今般のコロナ禍によって、今一度安国論を読み直すという気風が高まっています。それはそれで問題提起としてはいいのですが、正法帰依という耳触りの良い文章のみをキャッチコピーとして用いるのでは無く、それは謗法禁断という厳しい誡めと並行しなければ実現できない、ということも考えなければ、真の意味での立正安国実現にはならないのでは、と考えるに至りました。

高佐　東日本大震災の後、石原慎太郎都知事（当時）の発言が切っ掛けとなり、震災天罰論が問題になりました。これに関連して、関東大震災の際に、渋澤栄一や内村鑑三が天譴論を展開し、芥川龍之介や柳田国男がそれを批判したことなども掘り起こされ、災害と人間、自然と人為との関係、更には、「天」すなわち超越者を現代に於いてどのように捉えるべきか、一般言論界でも議論になりました。

佛教（学）界では、末木文美士東京大学名誉教授が、石原氏の発言を肯定的に評価し、論争を巻き起こしました。そして、末木先生が、その議論の中で代表的な天罰論として言及したのが、他でもない日蓮聖人の『立正安国論』でした。

現宗研でも、末木先生、本年遷化されました伊藤瑞叡先生、そして北川前肇先生をお招きして、シンポジウムを開き、『震災と祈り』という冊子にまとめました（『震災と祈り　東日本大震災を考える』二〇一六年　日蓮宗現代宗教研究所）。

私自身は、日蓮聖人の思想を原理主義的に受け止めるとしても、震災天罰論をストレートに持ち出すことには問題があると考えましたが、宗内外にそうした捉え方をする方は多かったように思います。先ほどは申し上げませんでしたけれども、現代に於いては、薬師経の七難、それに対する『立正安国論』の所説を、日蓮聖人の主張のままに受け止めることには問題があろうと思います。

第一に、七難の中には、現代では「難」であると認め得ないものがあります。第二に、七難が興起する原因は宗教的なものであるとすることには、些かならず無理があると言わざるを得ません。

地震が発生するメカニズムが解き明かされつつあり、ウィルスが発見されて感染症の仕組みが突き止められている現在、地震や疫病を、或いは気候変動を、宗教的な災難と見做すことには、よほどの議論、覚悟が必要であろうと思います。

とは言え、コロナ禍が国難であり、全世界の厄災であることは疑いのないところです。『智慧亡国御書』に、

大悪は大善の来るべき瑞相なり。一閻浮提うちみだすならば、閻浮提内広令流布はよも疑候はじ（定遺一一三〇頁）

とあります。日蓮聖人の災難論が「天罰論」に留まるものでないこと、むしろ、その先にこそ日蓮思想の真面目があることは、宗内でも余り触れられないように思いますが、『智慧亡国御書』は、そうした日蓮思想の展開が示され

た代表的なものの一つです。

大悪が大善の瑞相となるというのは、何もせずに、自然にそうなるのではありません。『立正安国論』を以て国家諫暁されたからこそ、正嘉の大地震を始めとする「天変・地夭・飢饉・疫癘」を、日蓮聖人は、あれは「瑞相」であったと仰った。「震災天罰論」同様、それを「瑞相」にして行く、そうした宗教的実践が、私たちに求められているということになるであろうと考えます。もう一つ御遺文を引きます。

ただ世間の留難来るとも、とりあへ給べからず。賢人聖人も此事はのがれず。ただ女房と酒うちのみて、南無妙法蓮華経ととなへ給へ。苦をば苦とさとり、楽をば楽とひらき、苦楽ともに思合て、南無妙法蓮華経とうちとなへゐ（唱居）させ給へ。これあに自受法楽にあらずや（定遺一一八一頁）

御存じの『四條金吾殿御返事』の言葉です。遺文の真偽の問題は、いま措きます。日蓮門下の信仰は、寿量本佛の救護を仰ぐ安心立命です。御題目の信心に徹して、至心に祈る生き方をすれば、宿業も能く転じて現世安穏たることを疑わないこと。

救われた体験を有たず、信心が固まっていないと、或いは、それなりに信心堅固でいたとしても、災難に見舞われたり、身辺に望まざることが起こってしまうと、疑いの心が起きる、迷ってしまいます。苦を避けようとすると、かへって苦の嵩が増す。ですから、覚悟を定めて苦を恐れず、甘んじて苦を受け取る。楽もまた同様で、強いて楽を求めようとしない。苦楽を超越して、敢えて避けず、強いて希わない。

以上、お説教でよく言うことですけれども、いま私たちの為すべき実践は、私たち自身もこれに徹する、ということであろうと思います。もちろん、然るべき対策はするのですが、そのためにも、正しい情報（諸法実相）を把捉し、

オタオタしないこと、踊らされないこと。「法華経の悟」を語れ、という課題は、とてもハードルが高いのですが、要するにそういうことではないでしょうか。

法華経は、周知の通り、一乗一佛を説く経典です。一乗は一佛に収斂いたしますので、要は久遠の佛を説く経である。その寿量本佛は、「毎自作是念　以何令衆生　得入無上道　速成就佛身」の佛です。毎に私たちを佛にしようとしている絶対の本佛がおられる、それを信じる。そして現世安穏を得る。この安心立命こそ、「自受法楽」であり、「法華経の悟」でありましょう。「ただ女房と酒うちのみて、南無妙法蓮華経ととなへ」る。私は、ウチでは滅多に飲酒いたしませず、外で飲んでは、バツの悪い顔をして帰宅いたしますので、こういう生活が出来るようになれたら素晴らしいだろうな、と思っております。（笑）

影山　これまで申し上げたように、現代人のリアリティからすれば、宗教ごとというのはスピリチュアルな事柄だから、これまでのような教義的な解釈では納得しがたいことです。まさに信仰というのは、日蓮聖人が「信仰の寸心を改めて」というように、私たちは観心・唱題することがもっとも大切だと思います。たとえば、ある国でロケットを打ち上げようと企画しても、その技術がなければ、とくに一昔前はＧＰＳ（位置情報機器）の技術はブラックボックスで、その蓋は開けることは出来ませんでした。しかし、その仕組みを理解しなくても、指示されたように従えばロケットを飛ばすことができました。信仰というものは、そのように宗祖がいわれたままを実践することだと思います。

これをもし、私たちが日蓮聖人のご遺文を読んで解釈できるというのであれば、私たちが日蓮聖人と同等であるか、またはそれ以上の宗教者ということになります。信仰というのはこういう事柄が大前提になっていると思います。このような信行について、私的なことを申し上げれば、毎朝、壱部経・八巻本の半巻と唱題・瞑想は徹底しています。現代宗教研究所の主任当時も研究所で読経唱題は続けていましたが、こういうことが宗教ごとの大前提になると思い

ます。

ところで、もし誰かに自分の信行を伝えよと思うときに、現代の社会では、何処かのお宅から読経の声が聞こえてくれば、その翌日には、近所の方々が「ねえ、ねえ、あの人なにか宗教やってるんじゃないの？」と、少しトーンダウンした信仰を揶揄するような話し声が聞こえてきて、日本ではもう「特定宗教」に居場所がなくなっているわけです。こういう社会で宗教ごとを伝えるにはどうしたらよいのかと思案していました。とくにこのコロナ禍の最中、すべてが自粛ムードですから、この三月からユーチューブで二つのチャンネルを配信しています。一つは呼吸法ベースの瞑想のお話で、もう一つは瞑想文化のお話です。その中で一〇月から毎朝七時から三〇分間のライブ配信で、一緒に一五分間の呼吸法ベースの瞑想を発信しています。

誰かに信行を伝えようと思ったとき、「特定宗教」に居場所がないのであれば、呼吸法ベースで伝えていこうということなのです。つまり信行というのは、簡単にいってしまえば、疑わない（勿令疑惑）こと、言葉を離れること、日蓮聖人の言葉では観心による無分別の体験ですから、そこではスピリチュアルな事柄に気づけるか、気づけないかという観心が行われているのです。

ですから、これを総合していえば、日蓮聖人が『観心本尊抄』では「法華経並びに、摩訶止観等の明鏡云々」ということは、「信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ」という信行行為になるわけですから、信行を中心とした考え方を作らなくてはならない。さきに申し上げましたように、「教化学」のスタンスとは意識の科学、もしくは内観の科学のことでした。内観の科学とは、私たちの心を実験室にして、そこに宗祖のお言葉を映して、それと同じものがあるかどうかを観察することです。つまり、観心・唱題することで、宗祖と同じ体験をしているかどうかを問うことが大事であり、宗祖のお言葉を追体験することが教化学のスタンスなのです。このような信行のあり方を昔からいわれている言葉でいえば「行学二道」であり、「仏道」と呼ばれるものです。

ところで、内観の科学、教化学のスタンスという考え方は、明治時代から始まった西欧の大学制度に模した学問体系とは大きく異なるものです。現在、私たちが仏教の代替としている「仏教学」（Buddhist Studies）は西欧の大学制度では哲学としての仏教です。つまり、仏陀や宗祖の言葉を解釈することが信仰のように思っております。じつは、この考え方は、キリスト教学にもとづく解釈学なのです。西欧の哲学のはじまりは、キリスト教の信仰がベースにあります。キリスト教では、聖書には神様の経綸が書かれているから、それを熟読玩味すれば神様の福音が分かるというものです。こういう西欧の哲学的な志向にもとづいて、明治時代に東京帝国大学が創設され、その東京大学に模して各宗派の宗門大学ができ、さらに各宗派で宗派の教学が出来上がってきたわけです。

ところが、本来の仏教とは、行学二道、仏道と呼ばれた信行のことで、それによって言語理性を離れること、煩悩を離れること、そういう体験的な理解が重要なのです。つまり解釈するとは、それ自体が煩悩だということなのです。煩悩を解決しないで、煩悩を解釈するということは、苦悩の上に苦悩を塗り重ねてゆくようなもので、それでは仏教ではないともいえるわけです。

ですから『観心本尊抄』には「摩訶止観五之巻に曰く、（中略）介爾も心あれば即ち三千を具す。乃至所以に称して不可思議境と為す。意此に在り。」（定遺七〇二頁）と、『摩訶止観』第七章「正修止観」十乗観法の一「陰入界」を全面的に引用し、「法華経並びに、摩訶止観等の明鏡云々」といい、内観の科学を明らかにし、「信じる」ことで無心さの体験をしなさい、信ずることによって生ずる安らぎ状態である「以信代慧」の信行を強調するのです。

すなわち、信仰とは、私たちの心の鏡に『立正安国論』の論旨を載せて「信仰の寸心を改める」の信行によって、仏国土顕現などの安心を映し出せるか、発見することができるかの行為を意味すると思います。つまり、『立正安国論』の論旨を解釈することではないのです。

「信」をもって「南無妙法蓮華経」と声高らかに唱題（観心）するとき、私たちは、通常の意識状態の「分別」と

は異なる別の次元の意識状態、「無分別」の世界である仏界というスピリチュアルな世界を体験するのです。これが「教化学」のスタンスの内観の科学（観心）です。

以上のように、教義などの思想信条によって表現されるスピリチュアルな事柄は、私たちにとってすべて無意識の世界のことだから、通常の意識状態では気づけないために、観心という仏教心理学（陰入界）によって肯定的な意識体験、言語理性を超えた気づきがなければ、その存在意義を失うのです。古来より仏道が「行学二道」、「行学一体」と称された所以がここにあるのです。

赤堀　私は一八歳の時、煩悩即菩提、久遠実成の教理を瞬時に体得しました。今日に到るまで、それ以上の驚きも喜びも経験することのない、不思議な瞬間でした。この後、私は四苦八苦によって迷わされることはなくなったのです。八苦は常に存在しているが、惑乱されることはないのです。三原所長が引用されている『戒体即身成仏義』に述べられた法華経の悟とは、

> 法華経の悟と申は、此の国土と我等が身と釈迦如来の御舎利と一つと知るなり。経に云く、三千大千世界を観るに乃至芥子の如き計りも、これ菩薩にして身命を捨てたまふ処に非ざること有ることなし文。此の三千大千世界は、皆釈迦如来の菩薩にておはしまし候ひける時の御舎利なり（定遺一四頁）

の御文です。この御文は真言等の解釈が、此土の存在そのものを指して法身と見るのに対し、宗祖は天台法華の義に随順し、釈尊の因行果徳の報土と見られるのです。その報土である国土に居住する我等はここから釈尊と同体とされます。

十界互具を単に理的に捉えるのではなく、依報を釈尊の反映したものとして、事的に転換して把握されています。「一身一念遍於法界」（妙楽大師）の見地に立たれたのです。

しかし、この論理構造を理解することは、至難であり、宗祖はこの論理構造を我等の眼で見、信得できるように、文応元年という世界史の上に展開されていかれたのです。

安国論は釈尊の悟りを、整束した事の一念三千を奏進としての様式に乗せて著されたものです。ここで、理ではなく事とされたのは、理法の一念三千を現実の中で見ることにより、具体的な方策を講じ、仏国を顕現することが、可能となるからです。観を見に換えられたともいえます。

次に安国論の論理構造を見てみます。安国論は宗祖の主張されるところを残して、引用経典を（　）に入れて傍らに置き拝読すると、一貫し、論旨は明瞭となります。『立正安国論抄録』を読ませていただきます。

「立正安国論」抄録

赤堀正明　撰

近年より近日に至るまで、天変・地夭・飢饉・疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、すでに大半に超え、これを悲しまざるの族、あえて一人もなし。

つらつら微管を傾け、いささか経文を披きたるに、世皆正に背き、人悉く悪に帰す。故に、善神は国を捨てて相去り、聖人は所を辞して還らず。ここをもつて、魔来り鬼来り、災起り難起る。

仁王経に云く、「国土乱れん時は、先ず鬼神乱る。鬼神乱るるが故に万民乱る」。これ偏に法然の選択に依るなり。悲しいかな、数十年の間、百千万の人、魔縁に蕩されて、多く仏教に迷えり。傍を好んで正を忘る、

善神怒りをなさざらんや。円を捨てて偏を好む、悪鬼便りを得ざらんや。如かず、彼の万祈を修せんより、この一凶を禁ぜんには。

予少量たりといえども、忝くも大乗を学す。一仏の子と生まれ、諸経の王に事う。何ぞ仏法の衰微を見て、心情の哀惜を起さざらんや。

天下泰平国土安穏は君臣の楽うところ、土民の思うところなり。それ国は法に依つて昌え、法は人に因つて貴し。国亡び人滅せば、仏を誰か崇むべき、法をば誰か信ずべきや。先ず国家を祈りて、すべからく仏法を立つべし。すなわち、四海万邦、一切の四衆、その悪に施さず、皆この善に帰せば、何なる難か並び起り、何なる災か競い来らん。もし先ず国土を安んじて、現当を祈らんと欲せば、速かに情慮を廻らし、いそぎて対治を加えよ。国を失い家を滅せば、何れの所にか世を遁れん。汝すべからく一身の安堵を思わば、先ず四表の静謐を祷るべきものか。

汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ。しかればすなわち三界は皆仏国なり。仏国それ衰えんや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。国に衰微なく、土に破壊なくんば、身はこれ安全にして、心はこれ禅定ならん。この詞、この言、信ずべく崇むべし。

先ず生前を安んじ、さらに没後を扶けん。ただ我信ずるのみにあらず、また他の誤りを誡めんのみ。

この抄録した安国論を基にその構造を分析すると、そこには事の一念三千を中心に条理が構成されていることが分かります。

近年より近日に至るまで、天変・地夭・飢饉・疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。

如是相

先に帰正以前の事の一念三千は、

世皆正に背き、人悉く悪に帰す

一念（邪念）

善神は国を捨てて相去り、聖人は所を辞して還らず。ここをもつて、魔来り

五蘊世間

国土乱れん時は、先ず鬼神乱る

国土世間

鬼神乱るるが故に万民乱る

衆生世間

帰正以後の事の一念三千は、

汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ

一念（正念）

しかればすなわち三界は皆仏国なり。仏国それ衰えんや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。国に衰微なく

如是相

土に破壊なくんば

国土世間

身はこれ安全にして

衆生世間

心はこれ禅定ならん

五蘊世間

と見事に法華経・釈尊に帰正以前と、帰正以後の相違を事相の一念三千によって説明されていることが了解されます。

さて私の悟りは、煩悩即菩提、生死即涅槃の言葉のもつ力用によって喚起されたものですが、安国論の事の一念三千の悟りとは、どのように会通されるのでしょう。

『立正安国論』は事相を中心に論じるため、十界十如の依処としての三種世間に人々の心の動き―一念―が展開されています。人々の織り成す一念である煩悩・業・苦が様々な十界の世界となり、表面化して三種世間を成しているのです。また、その世界を三道即三徳と信じることにより、妙法の土とも成るのです。この国土は、すべてを包含し、流転し、常住しているのです。

私の悟りは安国論を学ぶことによって、眼で見、確認・確信できるものとなりました。さらに今日の世界の有様を見るに、安国論を知った者の責任を全く感じるところです。

『観心本尊抄』に人界所具の仏界を難信され「心得ざれども現証有れば之を用ゆ」（定遺七〇六頁）とあります。『立正安国論』は、日蓮聖人が現された衆生成仏の現証の書とも言えるのではないでしょうか。

三原　ではここで、これまでの中で言い足らなかったこと等ありましたら、一分程度でご発言をいただきたいと思います。どなたかご意見ある方はいらっしゃいますか。ありがとうございます。特にご意見ないようですので、ここで五分間の休憩をとります。

では「信仰の寸心を改めて、実乗の一善に帰」して、「それでは」という問題に入ります。それだけでよいのだ、という考えもあるとは思います。しかし、『立正安国論』には、「早く一闡提の施を止め」（定遺二二四頁）とか、「いそぎて対治を加えよ」（定遺二二五頁）という、具体的な提言があります。かつて、『日蓮宗新聞』（二〇一二年七月

一〇日）に掲載された伊藤佳通上人の〈論説〉の次の一節を忘れることができません。

インドシナ半島といえば仏教圏というイメージが未だに強い。（略）しかし人々の心の中から仏教の存在は確実に薄れつつある。（略）実際、イスラム教に改宗したタイ人の多くに共通した認識がある。それは「仏教は何もしてくれない」ということだ。（略）葬儀も年忌も祈りの儀式である。それはそれで大切であるが、それで貧しい人たちが救われるわけではない。むしろそれが経済的な負担ですらある。（略）豊かな人たちのみを対象とした宗教はいずれ不要と見なされるに違いない。

ここ十数年、世に言われてきた「寺離れ」「僧侶離れ」は、『立正安国論』に示された「その施を止む」という、「不要と見なされ」た仏教への人々の行動かもしれません。昨年（二〇一九）一一月二五日、東京ドームで行なわれたローマ教皇によるミサに招待され、全日本仏教会の一員として私は参列させていただきました。フランシスコ教皇は「貧者のための教会」をモットーとしています。青山学院大学名誉教授・本間照光氏は、『毎日新聞』〈人類生存の日常と非日常〉（二〇二〇年五月二一日）に次のように述べています。

フランシスコ教皇も、くり返し警告してきた。「金銭という神」の支配のもとで、弱者と難民、自然破壊と戦争が生み出される。さらには、核戦争すらも暴発しかねない

ミサ当日、私たちに配布されたパンフレット『教皇ミサ　すべてのいのちを守るため』の中には、日本の現状についても具体的にふれています。（詳細『宗報』令和二年五月号〈現宗研だより〉）

しかし、日本仏教、そして日蓮宗が社会に対して具体的な提言や行動を示すことは少ないのではないでしょうか。『立正安国論』を奏進するという具体的行動を取られた宗祖の教団の一人として、シンポジストのお考えを、各自五分程度でお願いいたします。

髙佐　このシンポジウムにお声掛け頂いたので、三、四冊、コロナ時代、コロナ後の生き方について考える、という類の論攷のアンソロジーのような書籍や雑誌を買い求めました。生来の怠惰で、まだ全てを読了してはおりませんけれども、そもそもその執筆者の中に佛教者がおりません。せいぜい、末木文美士先生であるとか、読むべき書物として吉本隆明氏の『最後の親鸞』が取り上げられているだとか、その程度です。岩波新書と、朝日新聞の連載を纏めた朝日新書と、文春新書と、『現代思想』の臨時増刊を見た限りのことではありますが、恐らく、数多いであろう類似書のどれもそうは違わないであろうと思ひます。

バチカンのことは、現宗研主任時代に『宗報』だったか『所報』だったかに書いた記憶があるのですけれども、京都大学の山中教授がＩＰＳ細胞を作製した翌日、すなわち二〇〇七年一一月二一日に、ローマ法王庁生命アカデミーは「倫理的問題と見做さない」という声明を発表しました。バチカンはＥＳ細胞について、ヒトの胚を破壊することによって作製することから、誰かを犠牲にして別の人の命を救う「倫理的なマキャベリズム」であるとして反対していました。山中教授は二〇〇六年にはこの生命アカデミーの研究に参加していたそうです。

さて、日蓮宗としては四月一七日付で、宗務総長名でのコロナに対する声明が出されたようです。今般確認しましたが、ポータルサイトを開いても、それを探し出すのが大変でした。ホームページに「活動」「教え」「法話」「寺院めぐり」「仏教・仏事のＱ＆Ａ」という大項目があって「活動」をクリックすると、総長の令和二年の新年の挨拶があるほか、「基本情報」「宗門聖日」「宗務院からのお知らせ」「宗門紹介ムービー」の中項目があり、そのうちの「宗

務院からのお知らせ」を手繰って行くと、四月一七日まで溯ってようやく「命を護ることは、心を護り強く生きる力を得ること」という声明文に辿り着きます。

因みに、声明としては、それ以降、七月七日付けの「令和二年七月豪雨災害により被災されました皆さまへ」がありました。他の宗派をみてみますと、曹洞宗では、メイン頁に「正見」といふキャッチフレーズのようなものがあって、次がコロナ関係の頁へのリンク、浄土真宗本願寺派ですと、サイトを開くと、七月豪雨災害へのお見舞いが最初に上がり、すぐ下にコロナ関係の声明や対応についてのページへのリンクが貼られ、真宗大谷派と浄土宗では、コロナ関係頁へのリンクが真っ先にある、というような状況でした（令和二年一一月二〇日現在）。

考えを示せ、とのことでしたが、その前に認識しておかないとならないように思われる二、三の事実を申し上げました。宗祖が『立正安国論』で発せられた如き、時代状況に楔を打つような言説を、今日の私たちが持ち得るのか。そもそも言論にそれだけの力が残っているのか。仮に何か発信するとしても、伝統佛教教団としては、当たり障りのないメッセージしか出し得ないであろうとも案じます。

『立正安国論』の奏進に比するほどのことでなくとも、現代社会に相応しい方法で、教団も、教師も、提言する、行動するということについては否定いたしませんが、大向こうを唸らさずとも、檀信徒のひとりひとりに、お題目を唱え、教えに適った生き方をしていれば佛様に護って頂ける、という思いを持って貰えるように努めることが大切なのではないか、そんな風に思っております。

誤解のないように申し上げれば、お題目を唱えれば、佛様に護って頂けて、疫病にならない、ということではなく、仮令疫病に感染したとしても、「疫病を佛のあたへ給。はげます心なり、すゝむる心なり」（『師子王御書』定遺一六〇九頁）と護られているのだということを伝えるべきではないか、ということです。

言い換えれば、お施餓鬼の法要を、檀信徒の参列なしで催したりはせず、きちんと案内して、対策をして、一人し

か参列者がいなくとも、厳修して法話をする。「死身弘法」「不惜身命」とは申しませんが、如実知見し、怖がり過ぎないこと、煽りの言説に加担することになるような行いをしないこと。それを肝に銘じたいと考えております。

影山　ご質問に対して、様々なことを申し上げておりますが、まずはこれまでのように教化学のスタンスを前提にしなければなりません。宗教ごとを語ろうとする場合に、それは哲学的な議論ではなく、内観の科学として教化学のスタンスを持たなければ、日蓮宗ばかりではなく、日本の仏教界は存続しえないような状況に、現在あると思います。

このような考え方の大前提になるのが、日蓮宗現代宗教研究所が設立された当時の目的を理解することにあります。くり返しますが、昭和二六年にはじまる創価学会の折伏大行進、そして昭和三九年に政治団体公明党の設立まで、その教線拡大を創価学会の教学批判で、学会の教学はこのように間違っていると批判を続けても、それを阻止できなかった事実があります。社会的な宗教運動を教学的な是非論によって批判しても、それを阻止できなかったというところから、教学の現代化が叫ばれ、それを教化学と称したわけです。

つまり、いま私たちが行っていることは、いまから五〇年前と何ら変わっていないということなのです。ということは、現代の伝統教団は五〇年前から社会に対応できていなかった、すでに壊れていたといえるわけで、これをなんとかしなければならないわけです。

それに加えて、さきほどからお話ししているように、日本では特定宗教に居場所がない、お経を読んでいれば「あの人なにか信心しているみたいね」と信仰が揶揄されています。私はインドへとよく出かけます。サルナートの法輪寺をはじめ、リシケシなどのヨーガ・センターですが、その折によく見かけるのは巡礼さんです。彼らは大した荷物も持たずに数百キロも歩いて行きます。それは巡礼さん方は「神様に逢にゆく方々だから尊い人」という信仰心があるから、みな一宿一飯を巡礼さんにご供養するのです。

日本では信仰する人は、なにか特殊な人というイメージ、何かにすがる弱い人という感覚があるのです。ですから、日本の仏教界はある意味では、もう危ないという状況下にあるといえるのです。新興教団でも、大教団である創価学会さんでも、現在では現状維持が出来ずに、海外布教によって会員数を維持しているのが実状です。それこそ新興教団では一〇年後には消滅教団と目されている組織も数多く存在します。私のお寺でも一〇年後は消滅寺院と呼ばれるほど檀家が減る、まあ半減する現状が見えています。後継者のいない檀家が多いということです。つまり、社会のあり方が変わってきたということ、その社会の変化の中で、私たち伝統仏教の宗教ごとが通用していないという事実が見えているということです。

では、何がどうなって、現在になっているかということ、さきほどから申し上げておりますが、日本の仏教というものは、江戸時代と明治時代でハッキリとその仏教のあり方が変わったのです。僧侶が在俗化した「肉食妻帯云々」ということよりも、もっとも問題なのは、仏教が明治七年以降に大教院制を通じて、仏教が西欧の大学制度によって哲学の仏教になったということなのです。そして、仏教が哲学になったところで、各宗派が宗祖の考えを主張するようになり、これが宗学へと繋がっていくのです。それは仏教の哲学ですから観念論です。仏教は行学二道ですから、必ず喋っていることには、裏付けがあるのです。旧檀林など、昔の伝統仏教に入門すれば、必ず師匠からお経の読み方など、行学の二道の訓練を受けるわけです。そのような技術的な伝承をベースにしておこなわれるのです。

ところが、西洋の哲学では、そういう技術的な伝承をせずに、単に学問だけ、経文や宗祖の言葉や字義を解釈することに始終しているだけです。そのやり方で現在までずっときているのです。現代社会を見ても、こんなに社会がもめているのは、哲学的な解釈が現実の社会にマッチしていないからなのです。哲学的な議論は正しくても、その場では言葉を解して感情が動いてしまうので、人々の心がまとまらないのです。この哲学的な議論、言語理性で哲学の仏教をやっているために、正しい言葉で正しく議論しても、みなまとまらなくなっているのです。昔は行学二道でした

から、哲学的な議論の裏付けに、伝承ごととして僧院生活の中でお経を読むなど瞑想技術の伝承がありましたから、一つの形が出来ていたのです。

ところで、仏教では字義を解釈しようとすることは煩悩だといいます。言語理性で考えることは、合っているか、間違っているか、こういうことを期待したが、そうならなかった、そこで合っているか、間違っているかの議論が行われる、これが煩悩です。ところが、行学二道では、仏教の心理学ともいえる『摩訶止観』十乗観法の一「陰入界」で、哲学論議は「見惑や思惑」の煩悩だといっているにもかかわらず、その哲学議論を続けているから問題なのです。

もう五〇年も前に、創価学会の問題で気づいて、教学の現代化といったにもかかわらず、いまも同じことをしています。私はもうキリスト教化した哲学の仏教をやめて、信行を伝承する仏教、まあ行学二道のことですが、こういう教化学のスタンスをきちっと持たないと、日蓮宗ばかりではなく、他教団も存続しえなくなると私は危惧しております。ですから、この内観の科学、宗教ごとは自分が体験していない、また気づいていない仏陀の体験や宗祖の体験を自分の心中に載せて、自分が信行したらそれを体験した、それに気づいた、「あっ、浄土はあった」というように自分が体験しない限り、その教学議論は成立しないのです。

ですから、日蓮宗現代宗教研究所の設立当時の目的、教学の現代化、すなわち、教化学の再興が必要なのです。大学の哲学としての仏教ではなく、内観の科学としての仏教、行学二道の仏教が私の答えであります。

赤堀　宗祖が諫暁という行為を奏進という形式で行われたことは事の一念三千を釈尊の無上法と受容されるうえからは必然として把握されます。また、我らも行うべきではないかと考えます。ただ、今我らがどう行うべきかは、政治機構が異なり主権は国民にある点から、為政者である首相以下国会議員並びに国民に立正安国を建言することが宗祖の奏進にあたるのではないかと思い至ります。宗祖の非難されている浄土教は法華経釈尊の捨閉閣抛にあります。後

に、宗祖の矛先は禅・律・真言に及びますが、その論旨は共通して法華経釈尊の軽視、蔑視にあります。この点を現在の観点から捉え直してみましょう。

釈尊以外の諸仏は肉身を持たない化仏であり、極論すれば無縁の存在であります。人々の運命を支配する絶対神的位置づけをまとった仏でもあります。これらの諸仏を否定する宗祖の理解は、釈尊が「運命を支配する絶対神の存在は認めない」とする仏教の根幹の思想とも同致するのです。

それでは現在、このお考えはどのように受け止めたら良いのでしょうか。運命を左右するのは業であって、仏・神ではないのです。擬神化した絶対仏は仏本来の実在証明である。十界互具を失うのです。この立場から私に思慮すれば、一神教とみなされる宗教は宗祖の指示された浄土教の範疇に入るものと看破されるべきなのです。

日蓮聖人が批判された概念の浄土教を今日において見れば、ユダヤ教に端を発し、カトリック、プロテスタント、ロシア正教、イスラム教、仏教諸派等皆同致であります。三徳に合わせてみれば、師徳・親徳のない仏・神となります。またここで一言添えれば、本宗もまた一神教化してはいないかという点に留意すべきであります。試みに現在流布している仏教を類型化してみると、

一　通仏教型　仏教は皆同じ仏教で各宗派はその一部と考える。
二　道徳型　世間的に良いことをするのが仏教であり、癒しや傾聴を仏教と考える。
三　儀礼型　葬儀、法要が第一と考える。
四　絶対神型　絶対神化した仏が運命を支配すると考える仏教。

どれもが釈尊を紛らわし、隠し、殺す、道理、文証、現証のない不当な仏教であるとしか考量できません。これら

の道を違えた仏教を比較批判し、開顕統一することが今日における私たちの取るべき行いであります。

日本の仏教の始祖ともいえる聖徳太子は十七条憲法に「和をもって尊しとなす」と示しています。これは平和を願う人々にとっては標語のごとき言葉でありますが、太子はこの条件として「厚く三宝を敬え」と置かれ、仏法によって人々が誤りを正してはじめて平和がもたらされるとしています。コロナ禍の後にはすべての宗教の価値が改めて問われ一仏乗の教えが見直される時が到来すると信じています。

私は浅学菲才ながら、平成二〇年の安国論の講義録に今回の私見を加え、上梓することをもって奏進に擬したいと存じます。

古河　「具体的な行動とは?」ということで、とても範囲の広いテーマと思いますので、四つの視点に絞って述べてみたいと思います。一つめは、社会との関わりです。これには、①社会問題、社会不安への対応、災害支援・復興、平和運動、生老病死へいかに寄り添うのか、という姿勢。そして②に世間のニーズへの対応や、社会・地域への仏教のアプローチという姿勢などが挙げられます。

そして、こうした社会や世間からの要請に応じる、社会や人々のニーズに応えていくことの一方で、基調としたいことは、それらとともに仏弟子だから伝えること、伝えられることを保持し、いかに現代社会にアプローチするのかということです。応じることとともに、伝えるべきこと、伝えなくてはいけないことを両輪に考えていく。宗祖も釈尊に仕える仏弟子として自分がどうあるべきか、何をするべきかを常に考えられ、行動されていた。釈尊の弟子、宗祖の弟子であるという自覚と姿勢が大切と思います。

例えば、立正に基づく価値観、その正法に基づいた世の中の見方や考え方。仏教・法華経の教えに基づいた生命観、死生観。釈尊の世界の中で生きていること。他者を軽んじず敬うこと、利他の精神。それらが人々の生き方の、生涯

の指針となるように、ひいては個々人から社会へと社会通念として広がるような意識をもって臨む。こうしたことは、自然エネルギーの問題、環境問題、持続可能な社会のあり方を考えていくうえでも必要なことと思います。

二つ目に、先ほどの法華経の生き方ということからコロナ禍について考えてみると、心の持ち方と振る舞いが重要になるのかなと思います。自己中心的で利己的な生き方、刹那的な生き方ばかりでは、「相手にうつさない」ためのマスクの着用は疎かになり、感染者への非難や中傷、行き過ぎた自己責任論が横行し、個々人の集まりである社会全体で感染の拡大を食い止めることが一層難しくなります。何よりも荒んだこころは、体の免疫にも悪い影響がありそうです。「四表の静謐を祈る」、他者を思いやり、敬う。皆成仏道として自他の生命を尊重する。そうした法華経の生き方ができるように心持ちを積極的に示していくことが必要と思います。

三つめには、「立正安国」の教えのもと、現実世界に釈尊の仏国土を顕現する。仏国土であることを覚知できるような生き方、そうした人生観をもつ人々、社会を目指す。それは『立正安国論』の「汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ」の六十四字に示されるように、日本に留まるものではなく、「三界は皆仏国也」「十方は悉く宝土也」と、世界を視野に入れた広大なものと思われます。

先ほどのアジアの仏教国の話と重なりますが、釈尊を信仰するという立場だからこそ、世界の仏教徒との団結に寄与することが出来るのではと考えます。久遠実成の教主釈尊への信仰を堅持しながらも、世界に向けてはあらゆる立場の仏教徒が連帯しうるように工夫して伝えていくという視野を持つ。釈尊一仏のもとに仏教徒が連帯していく先に、その結果として通一仏土が顕現され、皆帰妙法の祖願達成に近づくことを願います。

四つめには亡き方を弔うことについてです。『立正安国論』は「先づ生前を安んじ、さらに没後を扶けん」（定遺二二六頁）と結ばれ、後年の『報恩抄』では「無間地獄の道をふさぎぬ」（一二四八頁）と、宗祖はご自身の法華経弘通のご生涯をふり返られています。

如来使としての自覚をもって、法華経とお題目で故人を釈尊のいらっしゃる霊山浄土に導く。日常語としての「ご葬儀」ではなく、日蓮宗の葬送儀礼、引導の意義をあらためてふまえ、自覚と覚悟をもって望まなければならないと感じます。

それとともに、遺族の悲嘆に僧侶としてどのように寄り添うのか。宗祖のお手紙を拝見すると、悲しいとき、寂しいときに一緒に涙している情景が浮かびます。そのような宗祖の姿を忘れることなく、悲嘆をどのように軽減することができるのかという視点、その手立てを考え、よく学ぶ必要があると思います。

「立正安国」の教えのもと（正法をたて、安国を実現する）、久遠実成の釈尊と法華経の教えを弘め、社会と人々にいかに寄り添うのか。現世は安穏に、後生はお釈迦さまの御許にお導きできるように、時代の進展に応じて行動していきたいと思います。

水谷　以前に識者の方と「日蓮教学を世界宗教にするには」ということを話したことがあります。その為にはまず、日蓮門下共通の日蓮理解がなければ土俵にも立てないね、となりました。私はその糸口は安国論にあると考えています。

例えば日蓮門下の垣根をはらい、日蓮聖人の教義の部分を語ろうとすると、本尊奠定の問題や仏陀論の問題、私が課題とする大石寺系統における日蓮本仏の問題もあります。またこれらの問題と密接に関わりあうのが遺文の疑義問題です。外部の人からよく「日蓮宗って本当に真筆中心主義なんですか？」と聞かれます。私はその問いに「立正大学が真筆中心主義です」と答えます。

現行日蓮宗は、八品派教団における慶林房日隆上人、大石寺教団における堅樹院日寛上人などの他門流と違い、教学策定の尺度となる先師をたてませんが、それは日蓮聖人遺文に直参し、その教えを乞うことが可能な、所謂「日蓮

聖人直参教学」が許されるという強みでもありますが、それは転じて、思想的に一枚岩になれない弱みでもあります。

しかし立正安国という普遍的な日蓮思想を対象とした場合はどうでしょう。門流間における教義異論や、遺文の真偽は問題となりません。基本的には全門下同じ読み方をするでしょう。あってもせいぜい「実乗の一善」は何を意味するか、ということくらいです。奥底にある普遍的な立正安国という思想から、大きくぶれることはないと思われます。

具体的な行動と言えるかは分かりませんし、個人的な活動の紹介になり恐縮ですが、そういう問題意識をもって、先日、日蓮正宗法華講員・創価学会員・顕正会の信者達と、オンラインコミュニティツールのZoomを使い、それぞれの教団の立場から、安国論を語り合う機会を設けました。日頃から攻撃し合っている者同士を一同に集めるため、建設的な議論ができるかという心配はありましたが、当日は三〇名以上の参加があり、比較的穏やかに終わりました。そしてまた、安国論理解にも大きな意見相違はありませんでした。やはり立正安国思想は、各教団において普遍的かつ重要な日蓮思想として受け入れられているということがあらためて確認できたのであります。

ただ一点、問題となったのは安国論を原理主義的に考えるのか、あるいは安国論奏進という日蓮聖人の宗教的姿勢をくみ取り、現代社会に活かすのか、ということです。

前者に立脚する場合、当時の鎌倉社会と違い、令和の今の世においては、法然浄土教や、その旗印となる捨閉閣抛という仏教破壊の教えは弘まっていません。何故か分かりませんが、現在の浄土宗もそれを用いてはいません。安国論を破邪顕正の書と見るならば、現在における破邪の対象は何か、ということは大きな課題でありましょう。

また現在は議院内閣制であるために、鎌倉時代とは社会の仕組みが異なります。当時は国主や公家・武家を諫めることは、同時に国家・社会に属する者も諫められたと考えることもできましょう。ただし現代社会において、総理大臣を国主と見た場合、その信仰を是正することに大きな意味はあるのでしょうか。立正安国の具体的実践というのは、

このあたりの問題をよくよく考え、教団としての主張を明らかにしなければ、その現代的意義というのは、有名無実になってしまうのではないかと思うのであります。

私は『立正安国論』は、個の安穏（現世利益）よりも国全体の安穏（立正安国）を願われた著作であると考えます。『撰時抄』において「余に三度のかうみやう（高名）あり」（定遺一〇五三頁）と回顧されることからも、個を正すというよりも、公権力を正すことによって、日本国、そして世界の安穏を志向されました。それを令和の今日において、どう具体的実践に結びつけるかは、これからも宗団をあげて考えなければならない課題かと思いますが、その思想を端的に表現されたのが、日蓮信仰者として高名な、宮沢賢治『農民芸術概論綱要』の一文、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」という言葉であるよう思うのであります。

三原　本日はありがとうございました。ここで、私の感想を述べさせていただきます。小説家・葉室麟氏に『嵯峨野花譜』（文藝春秋　二〇一七）という作品があります。ひとりの華道家を描いたものです。この作品を解説して、澤田瞳子氏は次のように述べています。

一分の欠けもなく美しいものを、美しいと誉めそやすのはたやすい。だが葉室さんは蓮が泥の中から花咲くように、苦しい世の中でも清く生きようとする人の生き様こそが美しいと信じた。

――この世は苦に満ちた、苦の世じゃ。されど、同時にひとが清く生きる浄土でもある。

――ひとは無惨に散らされるばかりかもしれぬ。しかし、それにたじろかず、迷わず生き抜くことにひとの花があるのです。

苦しみの穢土は、ひとが清く生き抜くことによって浄土となるのです。宗祖は『開目抄』に「末法の始のしるし、恐怖悪世中の金言のあふゆへに、但日蓮一人これをよめり」（定遺五六〇頁）と示されています。私たち一人ひとり、そして、世の中のみなさまが仏の教えを実行する、「迷わず生き抜く」すなわち「不染世間法如蓮華在水」であることによって、この世界が浄土となるのではないでしょうか。これをもちまして、本日のシンポジウムを終わりにしたいと思います。

本日は誠にありがとうございました。